戸田市文化財調査報告 Ⅸ

美女木八幡社脇遺跡第1次発掘調査概要

埼玉県戸田市教育委員会

序

戸田市の北西部に「美女木（びじょぎ）」という、きわめて美しい地名の所がある。この地は、鎌倉の鶴岡八幡宮の神領地、別名笹目御院領といわれ、笹目郷の中心地であります。

かって、この地域には、肥沃な水田が広がり、その中に八幡神社の社叢が浮びあがって、いかにも夢の世界を現出していました。

ところが近年、この地に新大宮バイパスが建設され、さらに市の区画整理も行なわれ、市街地化が進み、広大な社叢も家並の中に吸込まれてしまいました。

このように都市化された今日、遅きに失したかもしれませんが、このたび、美女木八幡社脇遺跡の第1次発掘調査および関連調査が実施され、弥生時代から室町時代にわたる遺物が発見され遺跡の概要が明らかになってきました。今後も機会をとらえて、地元の方々の協力を得て継続調査を実施し、この遺跡の核心にせまって行きたいと存じますので、よろしくお願いします。

最後になりましたが、今回の調査に御協力いただいた地主の鶴岡洋吾氏をはじめ、猛暑にもめげず発掘調査に参加いただいた多くの方々に御礼申しあげます。

昭和50年2月

戸田市教育委員会

教育長　岡　田　弘

例　言

1　本書は、昭和49年8月20日～8月30日にかけて実施した。戸田市大字美女木字三宝谷所在の「美女木八幡社脇遺跡」の第1次発掘調査と、関連調査の報告書である。

2　調査事業は、戸田市教育委員会が主体となり実施した。

3　調査の担当者は次の2名である。

　　塩野　　博（県教育局文化財保護課）

　　伊藤　和彦（戸田市教育委員会）

4　出土品の整理は担当者が行なった。

5　本書は調査担当者が執筆した。

6　発掘調査にあたっては、県立戸田高等学校・蕨高等学校の先生および生徒諸君、慶応大学生、地元有志の方々にお世話になった。

7　鋼鐘の資料は、県文化財保護課の御教示を得た。

目　次

序　　教育長　岡田　弘

例　言

はじめに……1

遺跡の位置と立地……2

発掘調査の概要……3

出土遺物……4

おわりに……6

はじめに

戸田市の荒川左岸自然堤防上に13か所の埋蔵文化財包蔵地が所在する。このうち、上戸田・新曽地区に所在する遺跡については、確認のための発掘調査、そして本調査を経て遺跡の性格を把握してきた。昭和49年度は、戸田市の北西部、美女木地区に所在する八幡神社周辺の埋蔵文化財の性格を把握するための発掘調査を実施することになり、49年8月下旬開始を目標に諸準備を進めてきた。

一概に八幡神社周辺といっても、この神社を中心とする遺跡は、遺物の散布状態が極めて粗で、しかも広範囲にわたっており、はたまた区画整理事業も完了し、住宅や工場が建設されており、調査対象地を決定するのに苦労した。そうしたところ、八幡神社の西側に休耕中の畑地が所在していた。すこし、低地寄りで、遺跡の立地としては十分ではないが、地主の鶴岡洋吾氏の承諾を得ることができたので、そこを49年度発掘調査対象地として、調査の方法等を検討した。すなわち、この地は、鎌倉の鶴岡八幡宮の神領地の中心であったところで、過去何回か経験した遺跡とは、性格を異にする歴史時代の遺構等の発見も予想されるので、慎重に発掘計画を立てなければならないと考えたからである。その結果、今年度は、期間的な関係から調査範囲を200㎡に絞って精査し、あわせて、関係資料の調査も実施することになった。

写真1　美女木八幡社脇遺跡発掘風景

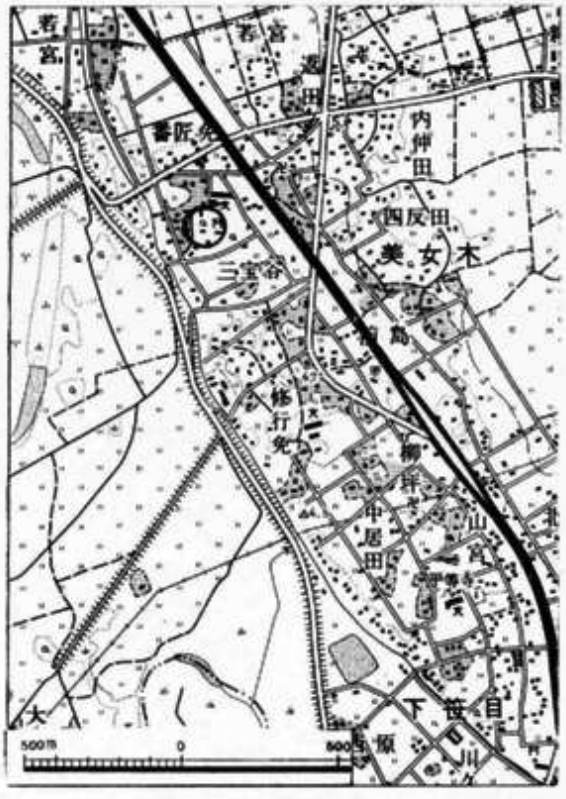
遺跡の位置と立地

美女木八幡社脇遺跡は、戸田市大字美女木字三宝谷に所在する。

遺跡の立地は、荒川左岸の自然堤防上で、南の荒川の沖積地に向ってゆるやかに傾斜ある高地の先端にあり、標高約5mである。

戸田市の荒川左岸の自然堤防は、この標高5m～標高3mであり、埋蔵文化財包蔵地はこの八幡社脇遺跡が最も高所に位置するものである。

遺跡の南は、水田地帯が多少残っているが自然堤防上には住宅が密集して建てられてしまっているが、遺跡の範囲は、鶴岡八幡社を中心として、北側にある美谷本小学校の校庭内にまで拡がり、その面積は、約6,000㎡ある。今回調査したのは、そのうち最南端に残っている畑地約250㎡である。



第1図　遺跡の位置（○印）

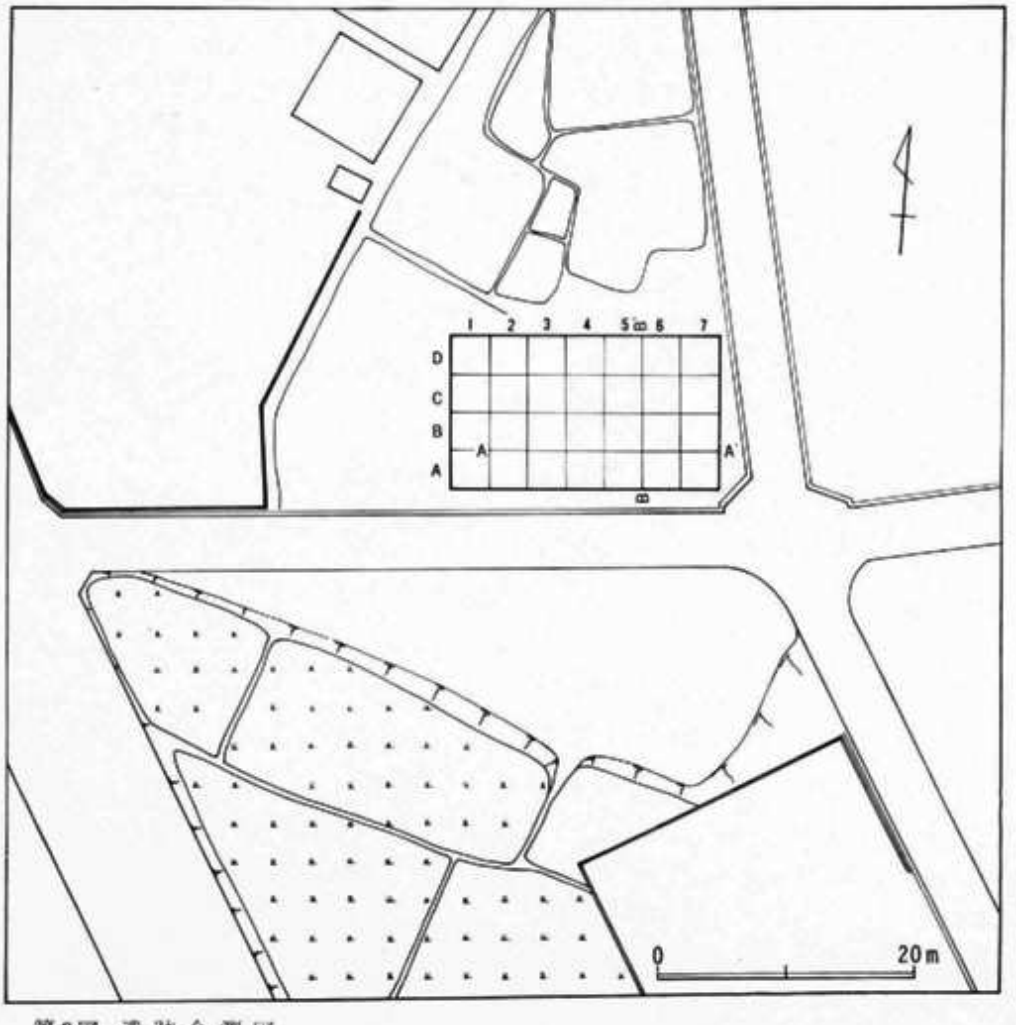
写真2　遺跡の遠景（南から）

発掘調査の概要

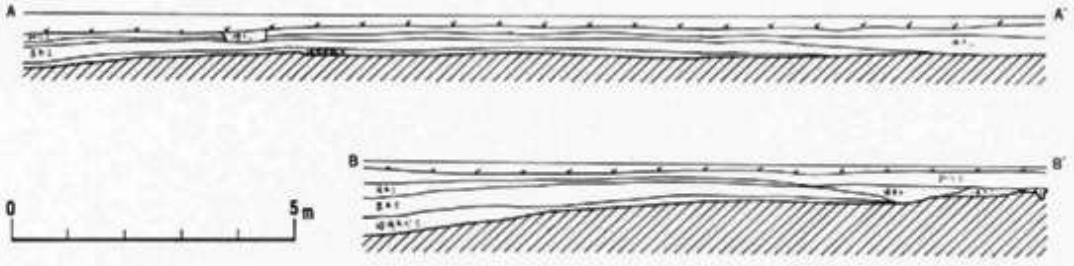
今回は、鶴岡八幡神社を中心に、土師器・須恵器の小片が散布している八幡社脇遺跡の最南端に調査区（A地域）を選定した。この地域には、分布調査の時点で地表に土師器の細片が散布していたが南側の水田に接するところがあり、遺構の存在については危ぶまれたところである。しかし、遺跡の南端を決定するにあたり、いつかは調査しなければならないところでもあった。

調査は、グリット方式をとり、調査予定地全体を発掘することにした。グリットは、3m×3mを1単位として、第2図に示したように、A1～D7までのグリット名称をつけて、順次地山まで掘り下げ、全調査区が掘りあがった段階で、遺構の再確認を実施することにした。

発掘は、覆土が硬く容易に掘れず、各グリットとも地山まで達するのに難渋したが、各グリットとも遺構の存在はついに確認できなかった。



第2図　遺跡全測図



第3図　調査区土層断面図

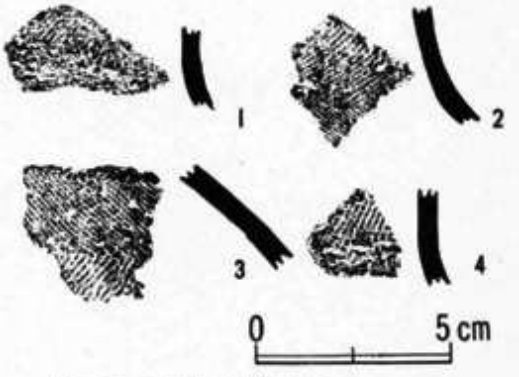
この付近の基盤（地山）は、黄褐色粘土層で、現地表から平均50cmのところにある。しかしながら調査区内で、東西および、南—北の土層断面（第3図）をみると、次のように傾斜していることが判明した。すなわち、東—西では、東から西方に向い、ゆるやかな傾斜をもち、また、南—北では北から南に向い著しく傾斜していることである。そして、この傾斜面上には、暗褐色粘土が堆積し、その上に黒色土が乗り、さらに褐色土が薄く存在する。

このように、調査地区に選定した、このA地域は、自然堤防の南側縁辺であり、遺憾ながら遺構の存在しない地点である。なお、遺物は、暗褐色土および黒色土の中から若干発見された。

出土遺物

前述のように、遺物は、主に最下層の暗褐色粘土層および、その上の黒色土層から発見されたものである。出土遺物は、すべて土器片および陶器片で、種類も、弥生土器・土師器・須恵器そして陶器と多彩である。

ここでは、数少ない遺物の中から、できるだけ多く図示した。

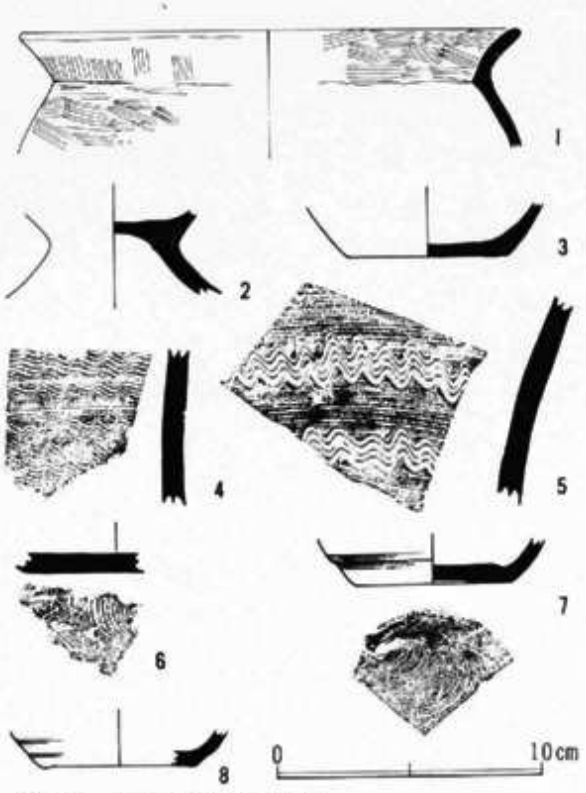


第4図　弥生式土器拓影図

弥生土器片（第4図1～4）　これらはすべて、壺形土器の破片で、胎土・焼成とも良く、色調は赤茶色を呈している。1は、A3グリットから発見されたものである。器面には羽状に細縄文が施こされているが、磨滅して明瞭でない。2～4は、C4グリット内から出土したものである。2は、頸部の破片で、羽状縄文が施こされている。3は、肩部破片で、羽状に細縄文が施されている。4は、頸部の破片で、細縄文と、その下に爪形の刻みが施されている。

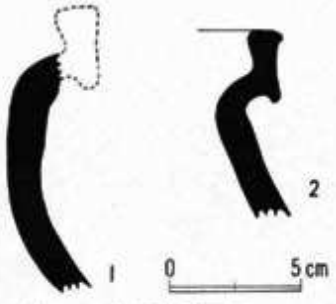
土師器　（第5図1～3）　1は、B4グリットから発見された台付甕形土器の口縁部である。頸部は緩やかに「く」の字状に折れ口唇部は丸くなっている。器外面および、口縁部内側には櫛状工具による荒い整形痕が残っている。色調は、赤茶色を呈するが、焼成胎土とも良好な土器である。2はA5グリットから出土した台付甕形土器脚部である。色調は黄褐色を呈す。胎土は、良く精撰されて密で、焼成も堅い。3は、B2グリットから発見された甕形土器底部で平底を呈する。

これらのグリットのほか、土師器の破片は、A3・B3・B6・C4・C7の各グリットから細片が発見されている。



第5図　土師器・須恵器実測図

須恵器　（第5図4～8）　4・5は、大型甕形土器の口縁部の破片である。4は、B4グリットから出土したもので、細い櫛歯により波状文を描き、中央の二本の太さの違う平行沈線が引かれている。5は、B6グリットから出土したものである。櫛状工具で軽く横に整形したのち、四本の太い櫛歯による波状文を描いている。なお、波状文の中と、内側全面に自然釉がかかっている。



第6図　陶器片断面図

6～8は坏形土器である。6は、A3グリットから出土した底部の破片で、糸切り痕を有する。7・8は、B4グリットから出土したもので、7には底部に糸切り痕が残っている。8は破片が小さく、詳細は不明である。なお、ここにあげた、A3・B4・B6グリット以外からの出土はなかった。

陶器片　（第6図1・2）　大型甕形土器の口縁部である。1は、B6グリットから出土したもので、口唇部を欠失している。頸部の中央から下、肩にかけて自然釉がついている。2は、C7グリットから出土したもので、口縁部が大きく折り返えされた幅の広い縁帯をもったものである。なお、この縁帯には、茶色の釉がつけられている。

おわりに

以上、美女木八幡社脇遺跡第1次調査の概要を述べた。最後に、この調査の結果を整理すると同時に、この遺跡発掘調査の歴史的意義について若干記述して、今後の調査の目標にしたい。

今回の調査地点は、一応美女木八幡社脇遺跡A地区と呼称したが、調査結果は、調査地点が自然堤防の南縁にあたっていたため、良好な遺構・遺物の発見がなかったのは遺憾であった。しかしながら各グリットから出土した遺物をみると、弥生時代から室町時代にわたっていることは、明らかである。すなわち、弥生土器は、弥生時代後期中葉の弥生町期のものと考えられる。この期の遺跡は、戸田市内では、鍛治谷遺跡（註1）、とうがまえ遺跡（註2）、前谷遺跡（註3）がある。また、土師器は古墳時代前期前半の五領式土器で、鍛治谷・新田口遺跡（註4）、南原遺跡（註5）、根木橋遺跡（註6）。須恵器は、糸切りを有する坏や大型甕形土器などから、平安時代は降らないものと考えられる。一方、陶器片は、常滑の大甕とみられ、室町時代のものである。このように、美女木八幡社脇遺跡は各時期の複合遺跡である。

弥生時代後期の開発に始まったこの地区は、堀之内・藪雨・若宮・番匠免・修行目・笹目等の地名が現在でも残っているように、笹目御院領の地として、鎌倉鶴岡八幡宮の神領地であった。この神領地の中心になったのが、この遺跡地内に鎮在する八幡神社である。

写真3　八幡神社社殿

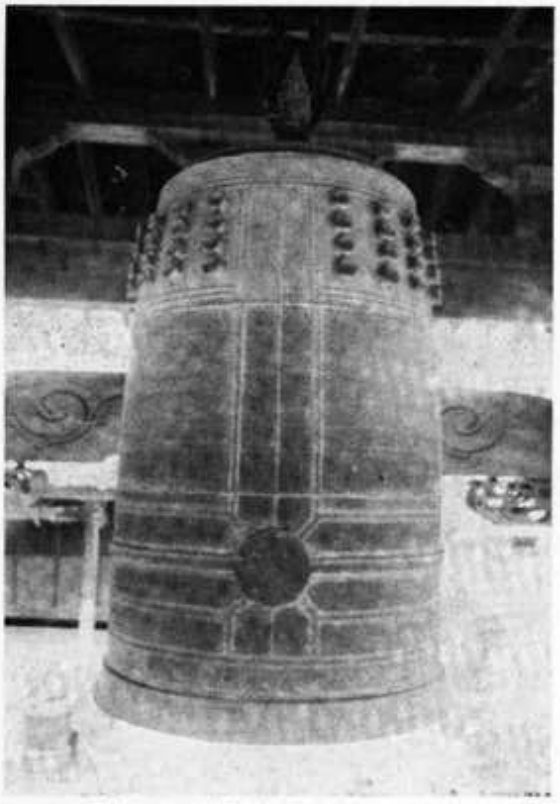


写真4　八幡神社銅鐘

八幡神社銅鐘計測値

總	高	110.5cm	縦帯幅		10.0cm
竜頭高		24.5cm	中帯幅		2.2cm
上帯幅		1.0cm	下帯幅		3.6cm
乳	径	2.8cm	撞座径		10.5cm
乳	高	2.5cm	撞座(下辺)～駒爪		17.0cm
鋳	次	3箇所	口径(内)		52.0cm
鋳次～駒爪		31.5cm 57.2 80.7	(外)		59.0cm
乳ノ間	1区	15.5cm×	(上)	26.0cm	
			(下)	28.5	
	2区	15.5cm×		27.4cm 29.0	
池ノ間	1区	28.3cm×	(上)	29.0cm	
			(下)	30.8	
	2区	26.0cm×		29.6cm 31.0	
	3区	26.0cm×		30.0cm 31.2	
	4区	26.0cm×		29.5cm 30.4	
草ノ間	1区	5.0cm×		31.5cm	
	2区	4.7cm×		30.5cm	
	3区	5.0cm×		31.0cm	
	4区	5.0cm×		30.7cm	

八幡神社は、旧笹目郷の惣鎮守で、社伝には、源頼朝が文治5年に鎌倉の鶴岡八幡を勧請したというが、足利尊氏が建武中興の論功に依って武蔵守を拝したので、建武2年8月27日に、足立郡笹目郷の美作権守知行分の地を鶴岡八幡宮の不冷座本地供料所として寄進しているので、神領に祭祀されたものである。その後も、関東管領の歴代を通じても依然として神領として存在していたのである（註7）。

また、八幡神社には、別当寺の円通寺があり、不動且阿弥陀愛染十一面観音を安置したが、現存しない。したがって、この遺跡内には、廃寺跡も含まれていることになり、これから地点を替えて発掘調査が進めば、別当寺の概要も判明するものと考えられる（註8）。

昭和45年度に戸田市教育委員会が主体となり実施した板碑調査では、この美笹地区において77基の所在を確認した。このうち、この遺跡地内にあった鶴岡洋吾家墓地に「延慶二年」（1309）の断碑がある。この延慶二年在銘板碑は、この地における初期開拓者の供養塔として現在に残る貴重な遺物である（註9）。

さらに、中世遺物としては、八幡神社に南北朝期の鋳造と考えられている銅鐘がある（写真4）。この銅鐘の計測値は、別表のとおりであるが、口径に比較して高さが高く、乳の間の割合が高さに比して少なく、また上部と下部との差の少ないこと等が、この銅鐘を細身、あるいは胴長に感じさせている。細部の造りをみると、下帯には唐草文を鋳出している。乳は4区4行4列で、合計64個ついている。竜頭は双竜で、撞座と同方向を示している。撞座は蓮台である。この銅鐘には、銘文はない

が、よく鎌倉末期から南北朝期の特長と様式を具備している（註10）。

以上のように、美女木八幡社脇遺跡は、鎌倉八幡宮神領地の中心地に所在するものであり、今後はこれら中世遺構・遺物の発見につとめ、あわせて史料や文献を駆使して、美女木地区発展の過程を把握して行きたい。

註1　塩野　博「鍛治谷遺跡第1次発掘調査概報」戸田市文化財調査報告Ⅰ。昭和42年

註2　塩野　博「墻構遺跡出土の土器」鍛治谷遺跡第1次発掘調査概報、戸田市文化財調査報告Ⅰ

註3　昭和47年8月発掘調査実施。方形周溝墓1基発見。

註4　塩野　博・伊藤　和彦「鍛治谷・新田口遺跡—方形周溝墓群の調査—」戸田市文化財調査報告Ⅱ　昭和44年。

註5　塩野　博・伊藤　和彦「南原（高知原）遺跡第1次発掘調査概要」戸田市文化財調査報告Ⅲ　昭和45年3月。

註6　塩野　博・伊藤　和彦「根木橋遺跡第1次発掘調査概要」戸田市文化財調査報告Ⅶ　昭和49年3月。

註7　埼玉県史第四巻によると、浦和市沼影の広田寺に、永正四年十一月十五日付け、当郷を権律師定源に譲渡するという補任状があるという。

註8　鵜岡　洋吾家に伝わる八幡神社境内図を参考にして、今後、その位置を明確にしたい。

註9　塩野　博編「板碑」戸田市文化財調査報告Ⅳ　昭和46年3月。

註10　田中一郎「埼玉の銅鐘」埼玉の文化財第14号　昭和49年3月。

昭和50年3月10日印刷
昭和50年3月20日発行

戸田市文化財調査報告 Ⅸ

美女木八幡杜脇遺跡第1次発掘調査概要

発行　戸田市教育委員会
印刷　株式会社　誠美堂印刷所